

鑑賞領域における段階的な言語表現活動の教育的効果

－「アイデア」を題材とした授業実践－

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 保坂 杏樹

1. 研究背景

中学校学習指導要領(平成29年告示)において、教科等を通じて「知識及び技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「学びに向かう力、人間性等の涵養」の三つの柱を基盤とした学力観が示され、その中で教科固有の見方・考え方を働かせながら深い学びを形成していくことが求められている。

音楽科においては、児童生徒が「音楽のよさや美しさを味わって聴く」ことや、「音楽に親しんでいく態度を養い、豊かな情操を培う」ことなど、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成が目標として掲げられている。特に鑑賞領域では、曲想や音楽の構造、音楽を形づくっている要素(音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成)に着目しながら聴き、音楽のよさや美しさを言葉で表現し他者と伝え合い、論じ合うことの重要性が示されている。その際、音楽を単に情景的・印象的に受け止めるだけではなく、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を聴き取ること(知覚)と、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連の働きが生み出すよさや面白さ、特質や雰囲気などを感じ取ること(感受)、それらの側面から積極的に言語化する学習活動が重視されている。

さらに「言語活動の充実」に関する事項では、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていく学習の充実を図る観点から、「音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置づけられるよう指導を工夫すること」としている。したがって、音楽の鑑賞では、学習者が音楽を柔軟な思考で、創造的に、言葉で評価することによって能動的な鑑賞活動が実現されるということがいえ

るだろう。また、小川(2017)は、「聴取」と「鑑賞」は異なる活動であり、音楽科における「鑑賞」は「その音楽が自分にとってどういう意味があるかという価値鑑賞することまでを含む」としている。すなわち、充実した鑑賞活動の実現を目指し、音楽を適切に「評価」するためには、曲想や音楽の構造、音楽の要素や背景などに着目して聴く必要がある。そしてそれらを踏まえたうえでどのように音楽を聴いて感じ取ったか、味わったかを言葉で批評することが鑑賞活動の重要な要素になる。

しかしながら実際の授業現場では、楽曲を聴いた後に「感じたことをどのように言葉で表せばよいのか分からない」「何に着目して記述すべきか分からない」といった課題を抱える生徒が多く見られる。教師が示した視点に基づいて記述することはできても、自ら音楽の特徴をとらえ、論理性のある文章としてまとめることには困難が生じやすい。「特定の課題に関する調査(音楽) 中学校」(国立教育政策研究所, 2010)によると、「音楽の授業で鑑賞をするとき、その音楽のよさや美しさを感じ取るとは好きですか」という質問項目に対し、「好きだ」「どちらかといえば好きだ」と回答した生徒は半数以上であった。その一方で、「音楽の授業で鑑賞をするとき、その音楽から感じ取ったことを言葉や文章などで表すことは好きですか」という質問項目では、同様に肯定的回答をした生徒が3割程度に減少してしまうという結果になっている。

このことは、筆者が実習協力校において実施した事前アンケートの自由記述欄においても、「感じたことはあるけれど、それを言葉にするのは難しい」「音楽をどう説明すればよいか分からない」といった記述が複数見られた(図1)。

また量的データにおいても、音楽を聴いて感じたことを文章で表すことに対し、自信のなさや

苦手意識を持つ生徒が一定数存在していることが確認された。特に、「音楽を言葉で表すことは得意である」と回答した生徒は全体の中でも低い傾向を示しており、文章化に関する支援の必要性が示唆された(図2)。

音楽を聴いて、「感じたことを言葉で表す(文章にまとめる)」活動について、どのように思いますか。自由に記入してください	
感じたことを言葉、文章にまとめるのが苦手なのであまりやりたくない	
頭の中で考えてもそれを言語化するのが難しいと感じる	
聴いた音楽について言語化できるのは、いろいろな場面で必要になるから、良い活動だと思います。	
音楽を聞いて感じたことを実際に言語にするとな個人的に言語では表せないような表現を感じてしまうから難しい	
聞くのは好きだけど言葉で表すのはむずかしいと思う	
言葉で表すのが少し苦手	
とても難しいです	
うまく言葉に表せない	
たいへん	※生徒の回答の一部を原文のまま抜粋

図1 言語化に関する生徒の自由記述

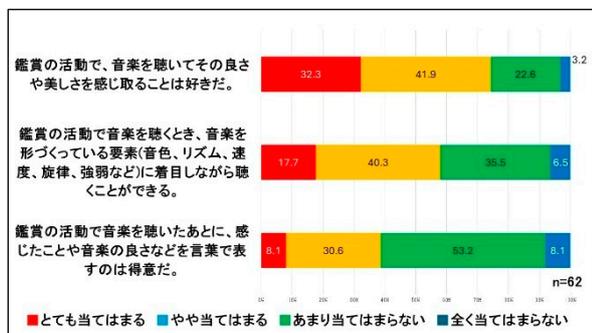


図2 言語化に関する生徒の意識

2. 研究課題

本研究では、研究課題を以下のように設定した。

「鑑賞活動において、生徒が主体的に音楽を受け止め、思考を深めながら批評文を書く力を育成するために、どのような活動や指導の工夫が効果的か。」

特に、音楽の特徴(知覚)と、そこから生徒が感じ取ったこと(感受)を区別しながら記述する等の段階的な手法を導入することで、生徒の言語化の困難さを軽減し、論理的かつ主体的な鑑賞能力や批評する力を育てることができるのではないかと考えた。このことから、研究仮説を次のように設定した。

「段階的な記述のプロセスや他者との対話的活動を通すことで、生徒は音楽を主体的に受け止めるようになり、作品の特徴を自分なりの視

点で捉え、音楽的観点に基づいた批評文を書くことができるようになる。」

「段階的な記述のプロセス」について、具体的には、

- ① 第一印象の言語化
- ② 具体的な鑑賞観点(音楽の構成要素)への着目
- ③ 他者との対話・意見共有
- ④ 記述の整理と文章化(批評文の作成)

というプロセス(図3)を用いることで、生徒の思考と記述内容が整理され、自分なりの観点で音楽のよさや美しさについて言語化する力が高まることを見込んだ。

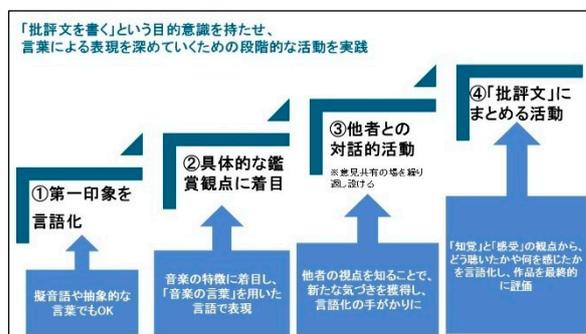


図3 段階的な記述のプロセス

3. 研究目的

本研究の目的は、「段階的な鑑賞活動を通して、生徒が主体的に音楽を聴き受け止める姿勢を促すとともに、音楽的観点に基づいて音楽を捉える力を高め、音楽の特徴や良さを『音楽の言葉』で表現する力の育成を図ること」である。これらを達成するための授業の工夫・手立てを計画し、実践する。なお、本授業では、中学校第2学年の鑑賞教材であるヴェルディのオペラ『アイダ』を題材とし、全3時間の授業を構成して取り組みを行った。

4. 研究方法

(1) 研究対象

本研究の実践は、甲府市内の公立中学校に在籍する第2学年の生徒68名を対象として実施した。

(2) 研究の手順

本研究では、授業実践・生徒の意識調査・ワークシートの記述内容の分析の3つの視点から研究を進めた。

授業においては、3時間の単元計画を構成し、段階的な鑑賞活動を中心に生徒の「音楽的観点に基づいて言語化する力」の変容を探った。

また、事前・事後の意識調査では、Google formを使用した4件法アンケート調査を記名式で行った。鑑賞活動や、感じたことを言葉で表す活動等に対する意識、また鑑賞活動への興味・関心の実態を把握することを目的としている。

生徒の記述内容分析においては、授業内で使用するワークシートを基に、記述内容や言語表現が授業を通してどのように質的に変化したかを見取る。「知覚(音楽の特徴)」や「感受(感じたこと)」などの視点から質的に分析する。

本研究では、先に述べた「段階的な記述のプロセス」を意識しながら授業を構成している。これは、音楽科新学習指導要領における「音楽の見方・考え方」を働かせた深い学びを促すために不可欠であると考えたためである。

5. 授業実践の概要

本章では、全3時間で構成した授業実践の概要について述べる。なお、実践時期は2025年10～11月であった。

5-1. 学習指導案の概要

(1) 題材名

オペラ『アイダ』の世界を楽しみ、感じたことを音楽の言葉で表そう

(2) 本題材で扱う事項の内容

第2学年「B 鑑賞」

ア (ア) 鑑賞に関わる知識を得たり生かしたりしながら、曲や演奏に対する評価とその根拠について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くこと。

イ (イ) 音楽の特徴とその背景となる文化や歴史、他の芸術との関わりについて理解すること。

〔共通事項〕(1)ア

本題材の学習において、生徒の思考・判断

のよりどころとなる音楽を形づくっている要素：「旋律」、「テクスチャ」

(3) 題材の目標

- ① 音楽の特徴とその背景となる文化や歴史、他の芸術との関わりについて理解する。
- ② 旋律やテクスチャを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したことの関わりについて考えるとともに、曲や演奏に対する評価とその根拠について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴く。
- ③ 独唱やオーケストラ、合唱などの、オペラの多様な音楽表現に関心を持ち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習に取り組み、音楽に対する感性を豊かにする。

(4) 題材について

本授業では、オペラ『アイダ』の世界を楽しみつつ、音楽の特徴を味わいながら鑑賞する。全3時間を通して、総合芸術であるオペラの魅力やアイダの世界観に親しんだり、鑑賞活動における核ともいえる「批評文」をより充実させ、音楽を形づくっている要素に着目して適切に言葉で表現したりすることを目的としている。

授業設計にあたり、授業観察で見られた普段の音楽の授業の様子等を踏まえ、生徒の実態に合わせた学習活動の設定を行った。高度な学習内容を扱うのではなく、音楽が得意な生徒もそうでない生徒もどちらも楽しむことができるような、誰一人取り残さない授業づくりを心掛けていく。

(5) 教材について

教材名 ○鑑賞教材『アイダ』から

教材選択の理由は次のとおりである。

ヴェルディによるオペラ『アイダ』は、歴史的背景やドラマティックな物型展開に加え、管弦楽や合唱、歌唱の多彩な音楽表現が融合した総合芸術である。本題材を扱うことで、生徒は単なる音楽鑑賞にとどまらず、物語や登場人物の感情、文化的背景など、多角的に音楽を感じ取り主体的に

理解する力を養うことができると期待した。

(6) 授業計画(全3時間)

第1時【オペラに親しみ、アイダの世界に入り込もう】

ねらい:音楽の特徴とその背景となる文化や歴史について理解するとともに、物語・音楽の世界観を知り、聴く意欲を高める。

第2時【音楽を形づくっている要素に着目しながら鑑賞し、感じたことを共有しよう】

ねらい:旋律やテクスチュアを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考える。

第3時【『アイダ』を評価し、自分の言葉で「批評文」として表そう】

ねらい:「アイダ」の音楽や演奏に対する評価とその根拠について考え、「アイダ」の音楽よさや美しさについて紹介文を記述する。

5-2. 段階的な批評活動

本授業では、次の4つの段階に沿って生徒の言語化・記述を支援するプロセスを設定した。

(1) 第一印象を言語化する

最初に、楽曲を聴いて感じたことを自由に書く活動を行った。ここでは正確さよりも、「まず表してみる」ということを重視し、生徒の心的ハードルを下げることに主眼をおいた。そのため、第一印象を言葉にすることが困難な生徒はキーワードや擬音語などの言葉を使用したり、感じたことやイメージを絵で表したりしてもよいという選択肢を与えた。

(2) 具体的な音楽要素を捉える

続いて、第2時では特に「音楽を形づくっている要素」に着目して聴き、「音楽の聴き方」を学ぶという学習を充実させた。事前調査での「鑑賞の活動で音楽を聴くとき、音楽を形づくっている要素に着目しながら聴くこと

ができる」という質問項目における回答結果を踏まえ、改めて「音楽を形づくっている要素」とは何なのか、音楽がどのようにして成り立っているのかを理解することを重視している。

音色・リズム・速度・旋律・テクスチュア・強弱・形式・構成という8つの「音楽を形づくっている要素」のうち、教師側から設定した「旋律」と「自分が気づいた要素」について、どのような特徴があるか、またどのようなことを感じ取ったかを考えながら聴く時間を設けた。この段階では、ワークシートに「音楽の特徴(知覚)」と「感じたこと(感受)」を分けて記入するフォーマットを用意した。鑑賞したことを文章として一括的に表現するのではなく、音楽の知覚的側面と感受的側面を分離して記述することで、表現内容の整理と思考の構造化を図ることをねらいとしている。また、これにより生徒が情報を整理しやすくなり、音楽の価値づけを促すことに繋げている。

(3) 他者との対話・意見共有

段階的な批評活動を行う上で、言語化の手がかりとしてグループや全体での意見共有の場を意図的に構成した。これは、他者との対話的な学びによって音楽のよさや美しさについて相互理解を深めることをねらいとしている。「聴く」という行為だけではなく他者と意見を共有し音楽の特徴等の気づきを促したり、新しい視点で音楽を見つめたりする場が必要だと考え、話したり表現したり、論じ合ったりする時間を意図的に設定することで、個々の気づきが増え、表現の幅が広がることをねらいとした。

また、対話の際には、どのように意見を共有するか、共有の観点を明確化して提示した。これにより、生徒は発言の観点を持って意見共有に臨むことができ、意見共有の場が表面的な感想の共有にとどまらず、音楽的視点に基づいた対話を活発化させることに繋げている。

(4) 記述の整理と文章化(文章として統合する)

第3時では、これまでの過程で得られた気づきや価値づけしたことをもとに、「アイダの音楽のよさを紹介する批評文」を書く活動を行った。

この他にも、授業の具体的な手立てとして、「アイダ」に関連した遊戯的・協働的なアイスブレイクや、オペラの概要・歴史・文化的内容をもとにしたオペラクイズを導入した。生徒の、主体的に音楽を聴いて受け止める姿勢の育成を目指し、普段馴染みのないオペラへの抵抗感や心理的距離を縮小し、オペラに親しみアイダの世界に自然と入っていけるようにするというねらいがある。

6. 分析

本研究では、授業実践の成果を検討するため量的分析・質的分析の2つから、授業の過程における鑑賞の授業に対する意識の変容や生徒の言語表現内容(記述内容)を見取る。

授業前後での「鑑賞授業や、感じたことを言葉で表すことに対する意識」を見るために、授業前と授業後に全6項目、4件法でアンケート調査を実施した。アンケート調査によって得られたデータは、「とても当てはまる」を4点、「やや当てはまる」を3点、「あまり当てはまらない」を2点、「全く当てはまらない」を1点として数値化した。数値化された各設問の点数について、ウィルコクソンの符号付順位検定を実施した。統計処理にはJASPを使用し、統計的有意水準は5%未満とした。

7. 結果

7-1. 全体的傾向の分析結果(事前・事後調査の結果)

すべての項目において有意差は認められず、3時間の実践では大きな変化がみられなかった(表1)。

表1 授業前後における鑑賞授業への意識の変化

項目	事前測定	事後測定	z	p値
	中央値(四分位範囲)	中央値(四分位範囲)		
①音楽の授業は好きだ	3.00(1.00)	3.00(1.00)	-0.47	0.62
②普段、音楽の授業以外にも音楽を聴く	4.00(0.00)	4.00(0.00)	0	1
③鑑賞の活動で、音楽を聴いてその良さや美しさを感じ取ることが好きだ	3.00(2.00)	3.00(1.00)	-1.01	0.29
④鑑賞の活動で音楽を聴くとき、音楽を形づくっている要素(リズム、速度、旋律、強弱など)に着目しながら聴くことができる	3.00(1.00)	3.00(1.00)	-0.66	0.59
⑤鑑賞の活動で音楽を聴いたあとに、感じたことや音楽の良さなどを言葉で表すのは得意だ	2.00(1.00)	2.00(1.00)	0	1
⑥鑑賞の活動で音楽を聴いて、感じたことや音楽の良さなどを人と話したり共有したりするのは得意だ	3.00(1.00)	3.00(1.00)	-1.08	0.24

7-2. 生徒個別における分析結果(ワークシートの記述内容の変化)

ここでは、主に変化のあった2名の生徒のワークシート(批評文)の中身の変化を質的に分析した。音楽的観点に基づいた言語表現の高まりを分析し、感じたことを言葉で表現する力がどの程度身に付いたかを見取る。

まず、女子生徒Aさんの変化である。Aさんのアンケート回答では、どの項目においても事前事後で変化はなかった(表2)。しかしワークシートの記述内容を見てみると、1時間目は「すごい」「壮大」などの抽象的な単語が多かったものの(図5)、2時間目で音楽の特徴を捉え、音楽の聴き方を学習したことで(図6)、それを踏まえ3時間目では音楽の特徴(図7、下線赤 知覚したこと)と感じたこと(図7、下線青 感受したこと)を自分の言葉で結び付けて書くことができている。3時間の学習を通して、「音楽的な語彙」が増え、音楽的表現を使用した記述内容になっていることが読み取れた。このことから、事前事後アンケートの回答には変化が見られなかったものの、ワークシートの記述内容は変化したといえる。

表2 Aさんの事前事後アンケートの結果

	質問①	質問②	質問③	質問④	質問⑤	質問⑥
事前	3	4	3	3	2	2
事後	3	4	3	3	2	2

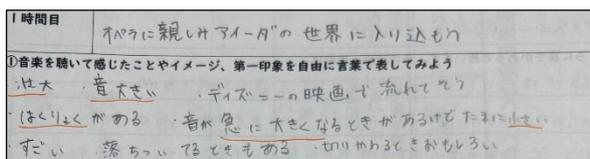


図5 Aさんの第1時の記述内容

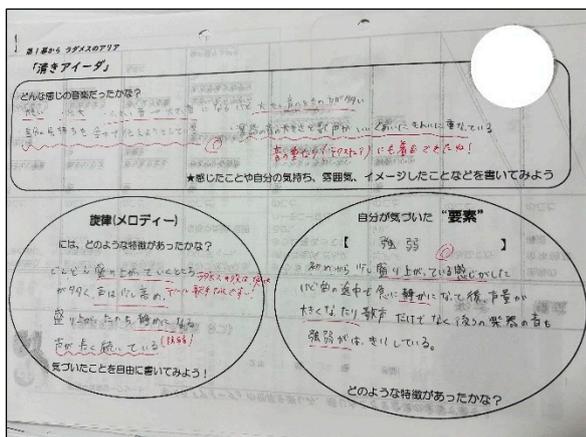


図6 Aさんの第2時の記述内容

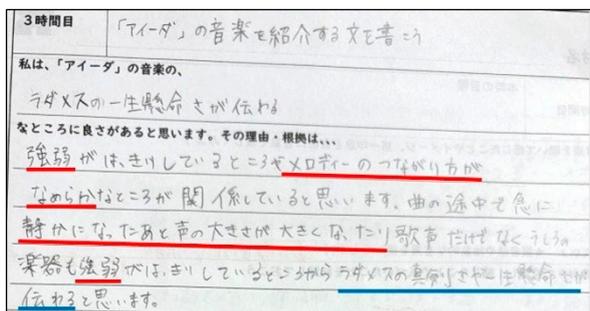


図7 Aさんの第3時の記述内容

また、事前事後アンケートの回答とワークシートの記述内容がともに変化した男子生徒 B さんの変化である。B さんは、事前事後アンケートの質問項目④(鑑賞の活動で音楽を聴くとき、音楽を形づくっている要素(リズム、速度、旋律、強弱など)に着目しながら聴くことができる)の回答において、事前では 1(全く当てはまらない)と回答したのに対し、事後では 4(とても当てはまる)と回答している(表 3)。B さんのワークシートの記述内容を見てみると、1 時間目は「グワーってなった」という抽象的なキーワードの記述であったが(図 8)、2 時間目で音楽の要素に着目して聴き「音楽的に聴く」ことを行った

ことで(図 9)、3 時間目では、音楽の特徴を根拠とし、音楽の特徴に着目した批評文を書くことができている(図 10)。

表 3 Aさんの事前事後アンケートの結果

	質問①	質問②	質問③	質問④	質問⑤	質問⑥
事前	2	4	2	1	3	2
事後	3	4	3	4	2	3

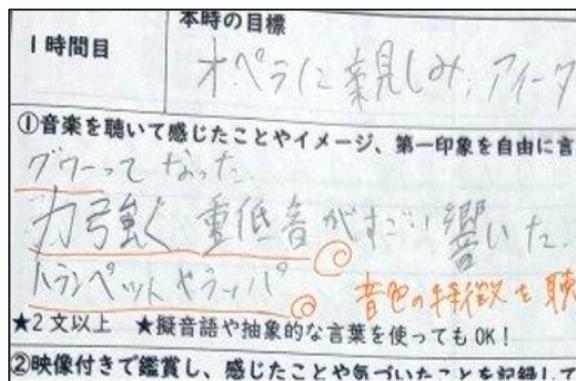


図8 Bさんの第1時の記述内容

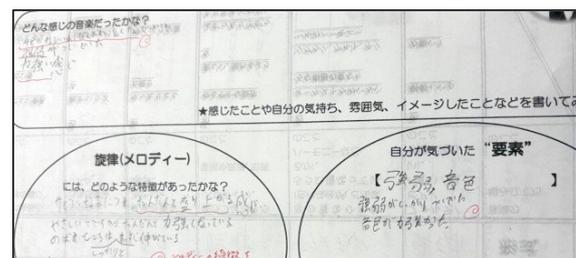


図9 Bさんの第2時の記述内容

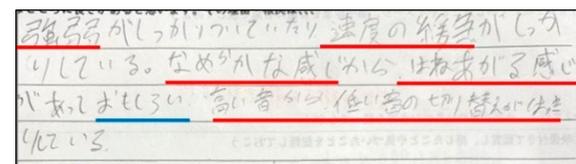


図10 Bさんの第3時の記述内容

8. 考察

先にあげた本研究の目的は、「段階的な鑑賞活動を通して、生徒が主体的に音楽を聴き受け止める姿勢を促すとともに、音楽的観点に基づいて音楽を捉える力を高め、音楽の特徴や良さを『音楽の言葉』で表現する力の育成を図ること」であった。「アイダの音楽を紹介する批評文を書く」という目的意識を持たせ、その達成に向けて段階的な鑑賞活動を取り入れた授業実践を行った結果、生徒の鑑賞における言語表現の質や

音楽の捉え方に一定の変化が見られた点において、目的は部分的に達成されたと考えられる。

具体的には、事前事後アンケートの量的分析において統計的に有意な差は認められなかったものの、ワークシートや批評文の記述内容を質的に分析すると、授業の進行に伴い、音楽的要素に着目しながら音楽の特徴や良さを音楽の言葉で説明しようとする生徒の姿が確認された。授業初期には感情的・抽象的な表現にとどまっていた生徒の中にも、旋律や強弱などの音楽を形づくっている要素と結び付けて、自身の感じたことを説明する記述へと変化する様相が見られた。

このような変化が生じた要因として、段階的な鑑賞活動を通して、生徒が「どのように音楽を聴けばよいのか」という鑑賞の視点を明確に学んだことが挙げられる。「音楽を形づくっている要素」に着目する活動を段階的に取り入れたことで、生徒は音楽を漠然と聴くのではなく、音楽的観点に基づいて意識的に捉えようとするようになり、主体的な「知覚」の姿勢が育まれたと考えられる。また、批評文を書くという明確な目的意識を設定したことや、他者との対話により音楽的知覚(気づき)を促し、言葉で表現する手立てとしたことも、音楽の言葉による表現を意識した鑑賞を促す一因となったといえる。

一方、本研究にはいくつかの課題も残された。まず、生徒間で言語化の得意・不得意が顕在化し、感じたことを言葉で表すことに難しさを感じる生徒が一定数見られた点である。特に、音楽を聴いて「どのように感じたか」という「感受」の側面については、支援が十分とは言えず、言語化に困難を抱える生徒が存在した。

また、量的分析において変化がみられなかった要因として、授業時間数が限られていた点が考えられる。数時間の実践では、生徒の意識や態度の変容が数値として明確に表れにくかった可能性がある。さらに、アンケートの質問項目において「得意であるか」という表現を用いたことにより、生徒が自己評価に慎重になり、肯定的な変化が数値に反映されにくかったことも一因として考えられる。

9. 今後の検討課題

今後検討していくべき課題として、まず、学期や年間を通じた鑑賞活動の系統的な展開が挙げられる。本実践では一定の質的变化が見られたものの、鑑賞における言語表現の力は短時間で定着するものではなく、継続的な学習を通して育成される性質のものである。今回得られた一定の成果を一過性のものにとどめず、継続的に音楽の特徴と感じたことを結び付けて言葉で表現する学習を重ね、生徒の言語化能力の定着と深化を図る必要がある。「聴く・捉える・言葉で表す」という経験を長期的に積み重ねることで、生徒の意識や表現力の変容をより明確に捉えることが可能になると考えられる。

また、本研究ではオペラ『アイダ』を題材として授業実践を行ったが、オペラは歌詞や映像を伴うため、生徒にとって内容をイメージしやすく、言葉で表現しやすい側面があった可能性が考えられる。今後は、歌詞を持たない器楽曲や、学習指導要領に示されている他の鑑賞教材を用いた場合にも同様の授業構成や手立てが有効であるかを検討していくことが求められる。

さらに、アンケート結果と自由記述の内容を踏まえると、生徒の実感をより適切に捉えるためには、質問項目の表現方法についても再検討が求められる。「得意・不得意」という自己評価だけでなく、「取り組みやすさ」や「楽しさ」「意義の実感」など、多面的な観点から生徒の変化を捉える評価方法などの工夫の検討が必要である。

10. 終わりに

本研究を通して、一人一人の生徒が持つ「言葉による表現の幅広さ」を改めて実感した。生徒の自由記述には、「(感じたことや音楽のよさを言葉で表すのは)難しいが楽しい」「自分の中で曖昧だったものを言葉にすることで整理できた」「友達と共有することで新たな気づきがあった」など、数値には表れにくい肯定的な学習経験が数多く記されていた。これらの記述から、言葉で表現する活動が、生徒にとって音楽理解を深める有意義な学習として受け止められていたことがうかがえる。

一方で、生徒の率直で多様な言語表現を、教員としてどのように評価するのかという点についても重要な示唆を得た。音楽的語彙の使用のみを評価の基準とするのではなく、生徒一人一人の感じ方や思考の過程、他者との対話を通して広がった気づきをどのように捉え、評価に結びつけていくかは、鑑賞領域における重要な検討課題である。

音楽におけるコミュニケーションと、言葉によるコミュニケーションを往還させながら、生徒が音楽の良さや美しさを主体的に表現できる鑑賞学習の在り方について、今後も検討を重ねていきたい。そして音楽教員として、本研究で得られた知見を活かし、より良い鑑賞授業の在り方や、生徒の多様な表現を尊重した評価方法について、実践を通して継続的に検討していきたい。

11. 謝辞

本研究の遂行にあたり、実習校の皆様には多大なるご理解とご協力を賜りました。特に、授業実践の場を提供していただき、日々の指導や助言を通して温かく支えてくださった音楽科の先生、ならびに学校関係者の皆様に、心よりお礼申し上げます。また、指導教官として終始多大なご指導を賜った、山梨大学教職大学院総合研究部教育学域教育学系(教育実践創成講座)准教授 金澤翔一先生に深謝いたします。

12. 参考・引用文献

- ・中学校学習指導要領(平成29年告示)総則
- ・中学学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編
- ・小川由美(2017)「鑑賞領域の活動」, 日本学校音楽教育実践学会編『音楽教育実践学事典』音楽之友社
- ・特定の課題に関する調査(音楽)2010年7月 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 4 生徒質問紙調査結果の概要 p219-
- ・図書文化 日本学校音楽教育実践学会 著 2024 音楽的思考を育てる資質・能力スタンダード
- ・教育芸術社 2016 音楽を学ぶということ これ

から音楽を教える・学ぶ人のために 監修者
今川恭子

- ・株式会社厚徳社 2010 新しい視点で音楽科授業を創る！新学習指導要領を先取りした実践方法 新山王政和
- ・中学生の音楽 2・3 上 令和7年度版 教育芸術社 p48-53